



TITLE:

京大広報 No. 421

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 421. 京大広報 1992, 421: 215-226

ISSUE DATE:

1992-01-15

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209239>

RIGHT:

ファイル中には未許諾による非表示部あり.

京大広報

No. 421

京都大学広報委員会



事務引継ぎを行う新・旧総長 ー関連記事本文 217 ページー
(12月12日、西島安則総長の任期満了(12月15日)に伴う事務引継ぎが、
総長室において、井村裕夫次期総長(写真右)との間で行われた。)

目 次

新年を迎えて	総長 井村 裕夫……………	216
＜大学の動き＞		
井村裕夫教授第22代総長に就任……………		217
部局長の交替等……………		217
名誉教授称号授与式……………		218
新年名刺交換会……………		218
自衛消防団員に感謝状贈呈……………		218
伊藤 清名誉教授が日本学士院会員に選ばれる…		219
オックスフォード大学との学术交流……………		219
京都大学市民講座「つち」講演要旨(その2)……		220
＜紹介＞		
農学部附属農場……………		221

＜保健コーナー＞		
アメリカの医療事情……………		223
討 報……………		224
＜資料＞		
国立大学の学生納付金の改定に 関する国立大学協会の要望書……………		225
日 誌……………		225
＜コラム＞		
桜のいのち	原子炉実験所教授 澁谷 巖……………	226

新 年 を 迎 え て

総 長 井 村 裕 夫

明けましておめでとうございます。総長就任後初めての新年を迎え、ここに年頭の御挨拶とともに就任にあたって考えておりますことを述べさせていただきます。

平成4年はわが国の大学にとって一つのターニングポイントになる年であろうと思われます。それは大学へ入学する人口がこの年で最高に達し、以後長期にわたって減少することが予測されるからであります。当然各大学は生き残りをかけて熾烈な競争を展開するものと考えられます。昨年大学設置基準が大綱化され、より多くの自由が大学に与えられるようになりましたので、各大学は独自の改革を進めることが予想されます。わが国の最先端をゆく京都大学も、より良い教育と研究の場を創造するべく、更に努力を重ねる必要があります。



平成4年は京都大学にとって特に大きい意味を持つ年になります。それは西島安則前総長のもとで進められていた教養部の改革、新たな総合人間学部設置が実現する年になるからであります。これに伴って各学部は4年（医学部は6年）の一貫教育へ移行することになります。すなわち教養課程、専門課程の区別がなくなり、一貫したカリキュラムが編成される予定です。この改革は単に専門教育の枠を拡げるものであってはならないと私は考えます。むしろ従来より幅の広い、高度な一般教育を学生に保証することにより、一般教育の質を高めるものでなければなりません。そうでなければ真に創造性のある、人間性の豊かな人材は育たないと考えるからであります。この目的のためには新しい総合人間学部を軸として、全学が一致して協力して行く必要があります。

総合人間学部の理念については京大広報（No.366 別冊及び No.419 別冊）に詳しく述べられているとおりであります。現代文明、特に科学技術の進歩がかえって人間の存在自体を脅かそうとしている現在、人間を総合的に捉え、自然と人間との調和を模索することは、21世紀に向けて最も重要な課題であると言えます。総合人間学部はこの学問のフロンティアを開拓する学部になってほしいと希望しています。それによってより深みのある一般教育を他学部の学生にも提供できるようになるでまいしょう。

学部の改革とともに大学院の改革も現在の京都大学の大きな課題であります。戦後の学制改革によって大学院は制度上は確立されましたが、実質的には学部が中心であり、大学院は附随的なものであった旧制度の影響が続いて参りました。このことが創造的な研究や学際研究の発展を妨げ、先進国の中で大学院生の比率が最も低いというわが国の現状をつくり出す大きな要因になったものと考えます。京都大学においてはすでに西島前総長の御努力で独立研究科「人間・環境学研究科」が発足しましたが、本年にはその第二専攻である文化・地域環境学専攻の設置が決まり、第一専攻である人間・環境学専攻の充実もはかられて、制度上は一応完成を見ることになりました。従来の文科系、理科系の枠にとらわれることなく、広く学際的な立場から人間と環境の関係を研究するこの新しい領域の発展を心から期待いたします。

大学院改革のいま一つの芽は法学部の大学院講座化であります。これは法学研究科を大講座化するとともに、全教官は大学院に所属し、学部教育を学科目に応じて兼担しようとするものであります。同時に高度の専門家を養成する専修コースも設けられます。

私は大学院の改革は単なる制度いじりであったり、講座増や予算増を目的としたものであってはならないと考えます。それは高度の専門教育と創造的な研究を行う場でなければなりません。研究と教育の

一致は大学院でこそ実現できるものでありましょう。歴史上初めて大学院を設置したのはアメリカで、1860年と言われています。その後の大学院の充実が、今世紀に入ってアメリカを世界の学問の王国にする力になったものと思われます。その意味で現在わが国で行おうとしている大学院改革は、明らかに21世紀を視野におさめたものでなければなりません。もちろん大学院の充実には予算の裏付けが不可欠ですが、同時に教官の意識改革も必要であります。新しい大学院像をめざした改革を是非実現してほしいと思います。

京都大学は建学以来自主独立の精神が強く、多くの独創的な人材を生みだし、またユニークな研究を展開してきました。この京都大学の伝統は、現在も脈々と続いているものと私は確信しています。しかし学問の世界では不断の努力が必要であります。京都大学が今後とも、強く潑刺とした知的生活を若い人々に保証できるよう我々は努力して行かねばなりません。その中から初めて創造的な研究や新しい時代を開く人材が生まれるであります。学部の改革も大学院の改革も、まさにこの一点に向けたものでなければなりません。

“歴史上一国が栄えたとき、そこには世界の先端をゆく大学があった”というのは、カリフォルニア大学の学長をつとめたクラーク・カーの言葉であります。この言葉通りわが国の盛衰はいま大学にかかっているのではないかと思えてなりません。京都大学は5年後に創立100周年を迎えます。京都大学は次の新しい世紀に世界の先端をゆく大学にならねばなりません。もとより私自身は甚だ非力ですが、全力を尽くして職責を全うする覚悟であります。京都大学の更なる発展のため、皆様方のお力添えを切にお願いいたします。(本稿は、1月6日の新年名刺交換会での挨拶をまとめたものである。)

＜大学の動き＞

井村裕夫教授 第22代総長に就任

12月16日、西島安則総長の任期満了に伴い、井村裕夫医学部教授が本学第22代総長に就任した。

総長就任式は、12月17日(火)午前9時30分から本部大会議室において、事務局、学生部及び附属図書館の職員が出席して行われた。

さらに、総長交代式が同25日(水)午前11時から京大会館において、岡本道雄、沢田敏男元総長をはじめ各部局長、評議員、各種委員会委員長等本学関係者多数が出席して行われた。

総長交代式では、丸山和博理学部長の教職員代表挨拶に続いて、西島前総長の退任挨拶、井村総長の就任挨拶があった。

井村総長は、就任挨拶の中で、「大学は今、変革の時代にある。まず、学部教育と大学院の改革に努力したい。そして、本学が次の世紀に世界の先端を行く大学になってほしい、そう願って微力を尽くしたい。」と、新総長としての決意と抱

負を述べた。

なお、これらに先立ち、12月12日(木)午後3時から西島総長の退任式が、本部大会議室において事務局、学生部及び附属図書館の職員が出席して行われた。このあと、西島総長は本部正面玄関前で多数の教職員に見送られて、京都大学に別れを告げた。

部 局 長 の 交 替 等

医学部長

井村裕夫医学部長の総長就任に伴い、その後任として佐々木和夫医学部教授(認知行動脳科学講座担当)が12月16日医学部長に任命された。任期は平成5年3月31日までである。

名誉教授称号授与式

12月18日（水）午前9時30分から、総長室において名誉教授称号授与式が举行され、西島安則前総長に本学名誉教授の称号が授与された。

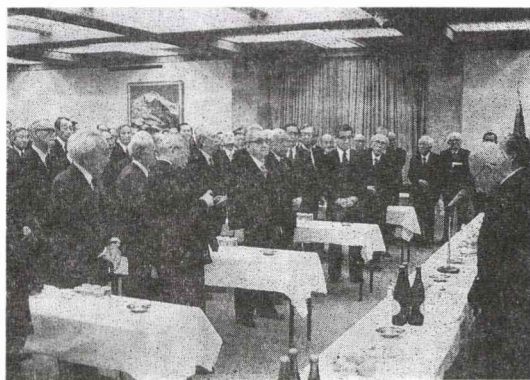
授与式は、丸山和博理学部長、作花濟夫化学研究所長、中川博次工学部長及び岩井 保学生部長の臨席のもとに行われ、称号授与のあと、総長の挨拶、西島前総長の挨拶があり、午前9時45分終了した。



新年名刺交換会

本学恒例の新年名刺交換会が、1月6日（月）午前10時から京大会館において、井村裕夫総長はじめ、奥田 東、岡本道雄、沢田敏男元総長、西島安則前総長、名誉教授、教職員約250名の出席を得て行われた。

はじめに井村総長から新年の挨拶があり、次いで奥田 東元総長の発声による乾杯ののち歓談、午前11時10分散会した。



自衛消防団員に感謝状贈呈

12月20日（金）午前10時30分から、本部事務局長室において、次の自衛消防団員に対して総長からの感謝状及び記念品が贈呈された。

この日感謝状を受けた団員は、青山茂男、橋本義雄、長谷川 功（以上経理部）、藤原輝行（理

学部）、中北英一（防災研究所）の各氏である。

このあと、午後1時30分から、本学自衛消防団と左京消防署合同による年末特別消防演習が法学部を中心に行われ、自衛消防団の日頃の訓練成果が披露された。



感謝状贈呈式 一事務局長室にて



年末特別消防演習 一附属図書館前にて

＜栄誉＞

伊藤 清名誉教授が日本学士院会員

に選ばれる



このたび、伊藤 清名誉教授が日本学士院会員に選ばれた。

以下に同名誉教授の略歴、研究業績等を紹介する。

伊藤 清名誉教授は、三重県出身、昭和13年東京帝国大学理学部数学科卒業、内閣統計局統計官を経て、昭和18年名古屋帝国大学理学部助教授、同27年京都大学理学部教授、同41年数理解析研究所教授となったが、同42年退職、デンマーク国オルフス大学教授、同44年米国コーネル大学教授を経て、同50年京都大学数理解析研究所に再び着任、同51年数理解析研究所所長となった。同54年停年退官ののち、学習院大学教授に就任し、同60年までその任に在った。その間、学界においても広く活躍し、昭和54・55年度には日本数学会理事長を務めた。

同名誉教授は確率論の研究において多年にわたり卓越した業績をあげ、今日この分野で活躍している多くの人材を指導育成した。

同名誉教授の業績として特に顕著なものは、「確率微分方程式・確率積分の理論」の創造である。刻一刻ノイズが加わって変化していく確率現象をノイズを含む常微分方程式（確率微分方程式）で記述することは、今世紀はじめより多くの人により考えられてはいたが、数学的に厳密な正当化はできなかった。同名誉教授はまずブラウン運動を基礎にした微積分学の体系（確率積分の理論）を作り、確率微分方程式をその枠の中で定式化し、解の存在、一意性等を示すことに成功した。この理論は最初、昭和17年に「マルコフ過程を定める方程式」として日本語で発表され、同19年及び同27年にそれを発展させたものが英語で発表された。この理論の中で特に重要な役割を果たす変換則は現在「伊藤の公式」として広く知られている。確率積分の理論は、その有用性の認識が徐々に数学以外の分野にも浸透し、今日では、物理学、化学、生物学や工学、経済学等の分野におい

ても用いられている。確率積分の理論は現在では確率解析と呼ばれるものに発展したが、同名誉教授はその研究を今も活発に続けている。

同名誉教授はこれらの業績に対して、昭和52年朝日賞、同53年日本学士院恩賜賞、同60年藤原賞、同62年ウルフ賞を受賞した。また昭和56年にパリ第6大学より、同62年にスイス連邦工科大学より、名誉博士の称号を授与され、平成元年より仏科学アカデミー海外会員となっている。

（数理解析研究所）

オックスフォード大学との学術交流

本学と連合王国のオックスフォード大学との「学術交流に関する一般的覚書」が、平成3年12月7日に交換された。

この学術交流は、昭和62年10月、西島安則総長がオックスフォード大学を訪問した際に、学術交流について話合いが始められたものである。

本学では、これについて検討が進められると同時に、国際交流委員会の答申（関連記事『京大広報』№363）に沿って同大学と協議が続けられ、平成3年11月、「覚書」を交換することが了承された。

オックスフォード大学の概要は次のとおりである。

創立：12世紀

教員数：約1,500 学生数：14,500

16学部（人類学・地理学、生物学、臨床医学、英語・英文学、法学、人文学、数学、中世・近世言語学、近代史、音楽、東洋学、物理学、生理学、心理学、社会科学、神学）

36カレッジ

—The World of Learning 1991 等より—

京都大学市民講座「つち」
講演要旨（その2）

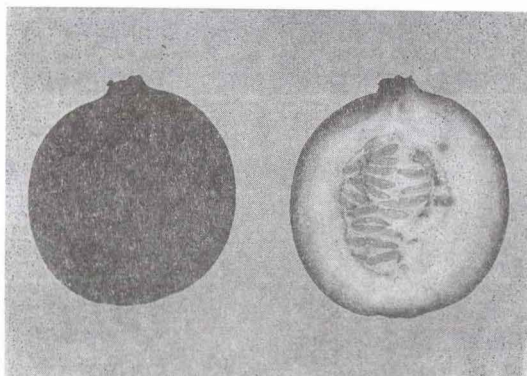
薬木の風土

—植物はなぜ“薬”をつくるか

薬学部助教授 上 田 伸 一

植物は多様な風土の下で幾億年にわたって生命を伝えてきた。その恵みを享けて生きる人類は、技術革新と人口増加に伴って、周りの風土を一変させた。ダイオキシン等による土壌の汚染もすみ、動植物種の絶滅が相次ぎ、地球の緑の大部分を占める熱帯降雨林の存在も危機に瀕している。演者は、世界の各地を旅して集めたアカネ科、ノウゼンカズラ科、クワ科等に属する植物と、それらから誘導した形態的に未分化なカルス細胞の生産物の形成過程を調べる中で、植物が巧みに、おのれが生きぬくための物質——人間にとっては“薬”——の生産を調節して多様な風土に根付いている姿をみて、人類の未来の為に植物に緊急に学ぶべきことの多いことを知った。

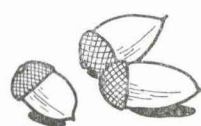
クチナシは駿河以西に自生するアカネ科植物で、イリドイド系モノテルペンを生産し、果実は山梔子とよばれ、止血や抗炎症薬として用いられてきた。この仲間はアジア、アフリカ、オセアニア及び中南米に分布している。これらの植物をカルス化し、培養すると、イリドイド生産能力のない細胞はよく増殖するが、やがて培地を消費し尽くして一斉に枯死する。これに反して、イリドイド生産細胞は僅かの培地上で長期間の培養に耐える。この性質を生かして細胞を選抜し、イリドイド生産性の低い熱帯産のものを含め用いたすべての類縁植物からイリドイド高生産カルスを得た。このカルスの再分化で生じる植物体を土に戻すと、イリドイド生産性は親植物のそれに戻る。クチナシ連植物のイリドイドのゲニポンド等は植物種子の発芽及び根の伸長を抑制し、その蓄積を巧みに調節することによって、それぞれの植物は現在の地にあると考えられる。クチナシや熱帯アメリカの類縁植物 *Genipa americana* の果実（写真）に



クチナシや熱帯アメリカの類縁植物
Genipa americana の果実

含まれるゲニポンドを加水分解してできるゲニピンは顕著な抗発癌プロモーション活性をもち、細胞毒性が殆どないことが判明した。ノウゼンカズラ科のキササゲの果実はアジアで利尿薬とされ、同科のタヒボ（古代インカの言葉で“神からの恵みの木”の意）とよばれる *Tabebuia avellanedae* の樹皮は南米で利尿及び抗炎症薬とされているが、両者のカルスは類縁のナフトキノンを生産する。これらの物質も顕著な抗発癌プロモーション活性をもつ。クワの根の皮は漢方で桑白皮として、利尿、血圧降下に用いられている。その葉が土壌菌 *Fusarium solani* に感染すると抗菌物質のカルコモラシン等を生産する。クワカルスを選抜すると、無菌状態にもかかわらずその生産は百倍以上になる。このカルスを用いて酢酸等から複雑なカルコモラシン等への生成過程の詳細を解明した。このように、植物が風土と深くかかわりあいながら“薬”をつくって生きていることを、親植物とその培養細胞の両面からみることによって、より明らかにすることができた。

（平成3年10月26日講演）



土と災害

—地盤環境をめぐるトピックス—

防災研究所教授 嘉 門 雅 史

人間生活はすべて地上での活動が基本である。したがって、その根幹となる大地は不動であることが暗黙の了解となっている。ところがここでの話題の「土をめぐる災害」は、このような前提が全く成り立たないところから発生する。すなわち我々の住む大地は、台風や集中豪雨にともなう大雨、あるいは地震等々の脅威にさらされており、これらによって地盤が変形し破壊することで土災害が発生するものである。元来わが国は地殻の変動の著しい造山帯に属しており、また気候区分ではモンスーン帯にあるから、大地の変状を避けて通ることができない。大地の表面の隆起の速さと侵食の速さは平均して1年間に0.1mmといわれている。100年間で10mmでは地上の建物にはほとんど影響が生じないが、これは何万年もの間の地質年代の平均の値である。現実には一瞬にして100m以上の標高差が生じることも稀ではなく、これが災害につながることとなる。

土をめぐる災害は多種多様である。すなわち、地震時に発生する液状化、地下水を過剰に揚水したことに原因する地盤沈下や関西国際空港のよう

な新しい埋立地における地盤沈下、鉱山の跡地などでみられる地盤の陥没、傾斜地における崖崩れや地すべり、火山活動による地盤崩壊、さらには近年全国的規模で問題になっている廃棄物による地下水や土の汚染等も含まれよう。このような地盤環境をめぐる破壊や変状の実態を解明することは極めて重要な課題である。近年では災害防止工事のための技術開発に著しい進展が見られるが、全国すべての地域にわたって、種々の土災害を防止することは困難と言わざるを得ない。したがって、災害の予知・予測によって、土地利用を規制することや警戒・避難の手法を確立すること等の対策が現実的であり、そのための努力も精力的になされている。

このような土災害をめぐるトピックスを国内外の災害事例に基づいて解説し、将来へ向けての展望を紹介した。

(平成3年10月26日講演)

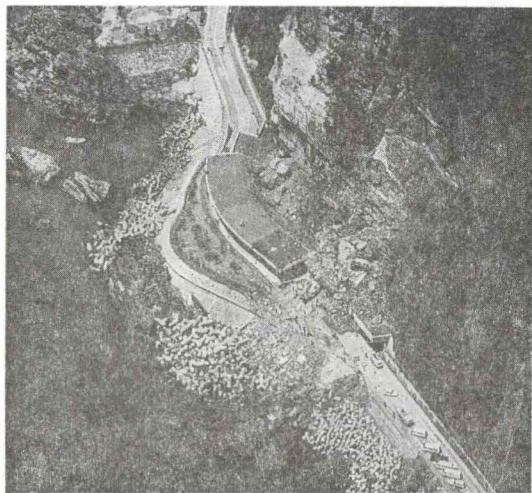
＜紹介＞

農 学 部 附 属 農 場

農学部附属農場は、農学部創設の翌1924年に北白川の地に設立されて以来、幾多の変遷はあったが(京大広報 No 159, 167, 357号参照)、一貫して、学生の実習教育と生産圃場を利用した多方面にわたる農学研究、すなわち土地利用、栽培体系、作物生産管理あるいは作物育成の基本技術などについて、多くの成果を挙げてきた。

学部学生の実習教育としては、主として3回生を対象とした専門教育科目「栽培技術論と実習Ⅰ及びⅡ」を開講している。農学各分野の研究が細分化し、高度化してきた結果として、生産圃場を基盤とした総合的な農業技術教育の必要性は一層高まっており、今後実習教育の意義がますます大きくなっていくと考えられている。一方、農場の研究活動は、今日の農業に即し、また明日の農業を展望して幅広い課題について行っているが、その二～三を紹介する。

農場で栽培されているカキに“平核無(ひらたねなし)”がある。我が国における代表的なカキ品種であるが、渋ガキであるため収穫後に脱渋が必要である。伝統的なアルコールによって樽抜き



(福井県越前町の国道305号線において、平成元年(1989)7月16日午後3時20分頃発生した斜面崩壊の現場写真(崩壊した岩石の量は1,100m³、最大崩落高さ25m、幅30m、通りかかったマイクロバスが巻き込まれ、死者15名を出した)

脱渋した果実の食味は抜群に優れているが、大量に取扱うには困難が伴う。普通 CO_2 ガスによる CTSD 法によって脱渋するが、専用ガス処理設備が必要であるうえ、処理時間が長くなる。また、必ずしも果実の食味がよくないことから“平核無”の真価が知られていない。京都大学が行ってきたカキの脱渋に関する研究成果は多いが、農場ではそれらの結果をもとに“平核無”を材料としてカキ果実の高速脱渋システムの創成を図っている。

近年の農村の労働事情を始めとする社会的条件の変化は、果樹栽培を喬木から矮性木へ、疎植から密植へと著しい栽培形態の変化をもたらしているが、それに伴う生長解析の研究から生産性向上のための理論的裏付けの構築を試みている。

最近、急激に消費が伸びてきたグリーンアスパラガスは多年生の草本である。その生理生態研究の成果を応用して確立した播種から収穫までを1年ですませる促成栽培の技術は、関係者から高い関心をもって注目されている。

コムギとライムギとの属間交雑によって、人為的に合成されたライコムギは、耐病性、不良環境適応性に優れた新作物であるが、穀粒形質が悪く、製粉歩留りも十分でないなど欠点が多い。このため更にパンコムギを交雑して、ライコムギにパンコムギの優れた穀粒形質を導入する試みを行っている。

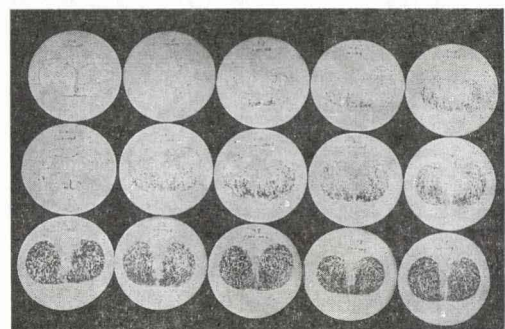
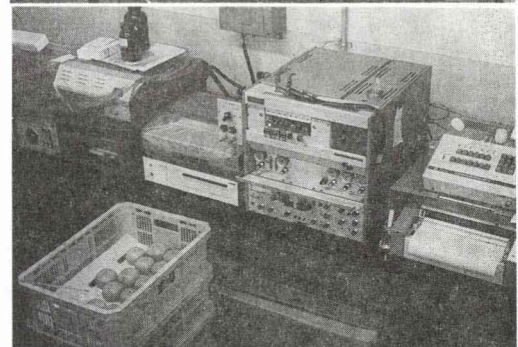
組織培養種苗システムの研究では、花卉（ラン、イリス、カラジウム）、果樹（カキ、キウイフルーツ）、蔬菜などの高品質種苗（バイラスフリー株など）及び胚培養や細胞融合（キク、ダイアンサス）の手法による新種植物の育成と増殖を行っている。

農場が抱える懸案の一つに遺跡問題がある。1928年大阪府三島郡磐手村（現高槻市）に摂津農場（現本場）を開設するための工事に伴って多量の弥生式土器や石器が出土し、農場を中心として弥生時代の集落遺跡が広がっていることがわかり、安満遺跡として知られるようになった。その後の調査の結果、遺跡は東西が桼尾川から八丁畷町に至る1,500m、南北は阪急線とJR線に挟まれる500mの広域に及び、農場全域が含まれることが明らかとなった。

高度成長によって急速に進んだ市街化の波は、農場及び農場とJR線との間の一部農地を残し、遺跡部分を含めて開発され尽くしてしまった。農地として利用されることによって、弥生時代の人々の営みが2000年を経過した今日も同じように息づいていることを感じ、改めて農業の持つ役割を我々に教えてくれる。現在及び将来における農場の教育・研究機能を保持しながら、保存する方法について関係当局との協議を行っているところである。農場内の遺跡を眺めて、2000年の歴史に思いを馳せると同時に、明日の農業を考えることのできる農場の姿を思っている。

（農学部附属農場）

カキ“平核無”の脱渋実験



渋味物質のタンニンプリント

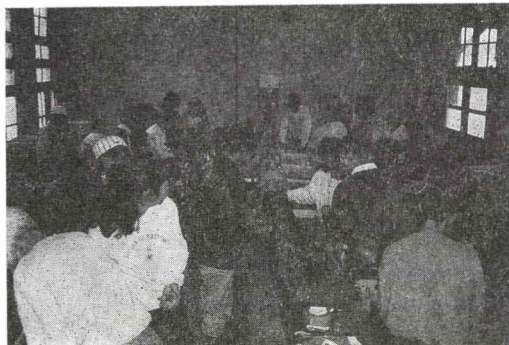
学生実習

(カキ“平核無”の収穫—樽抜き脱渋)

収 穫



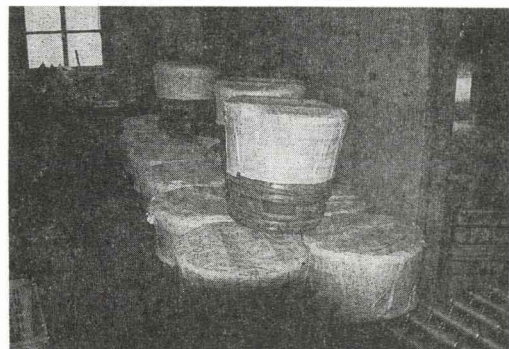
選 別



樽 詰



脱 渋 (7~10日程度)



保健コーナー

アメリカの医療事情

昨春まで約2年半にわたりアメリカで生活したが、仕事関係によりいろいろな医療現場に接する機会に恵まれた。私が留学していた病院はマサチューセッツ州のアメリカ東海岸に沿ったボストンという町にあり、アメリカ建国時の歴史的建造物が多いことや秋の紅葉、冬の寒さ等ボストンは京都によく似ている。現に両市は姉妹都市として交流を深めている。また、ハーバード大学やマサチューセッツ工科大学を始めとする大学や研究所が近く、日本からも多くの学生、研究者が来ている。京都から来ている人も多く、私が住んでいたアパートには京都大学の卒業生が5人ほど住んでいた。そのボストンで私が見聞きしたアメリカの医療事情について日本の医療事情と比較してお話ししたい。

1) 保険制度 日本とアメリカではいろいろな医療制度・設備が異なっているが、そのひとつとして医療保険制度の違いがあげられる。アメリカの医療保険は民営で、ブルークロス・ブルーシールドを初めとする保険会社が安い保険から高い保険までいろいろな種類の保険を売っており(アメリカでは保険にはいることを buy an insurance: 保険を買う—と表現する)、一家族で年間約40万円ぐらいが平均的な保険料金のようなのである。保険の種類により受診できる医師や病院、保険でカバーされる治療内容が限られてしまうが、平均的な保険にはいっていただければ特に不都合はなく、入院費用が1000万円かかっても自己負担はまったくない。保険会社によっては自社経営の病院を持っているところもあり、保険会社と病院間での保険の支払いがスムーズに行われるが、逆に診断や治療方法にある程度の制約がかかってしまうのではないかとと思われるところもある。また、疾病予防にも力を入れており、保険によってはエアロビクス等のスポーツジムにかかる費用をある程度負担しているものもある。歯科の保険も、抜歯や虫歯の治療にたいしては半分ぐらい自己負担しなければならないが、検診や歯石除去等の予防行為に対しては1年に1回無料でできる。

2) 入院 日本と比べると保険の制約もあり入院期間が短く、わが家でも息子が日本で生まれたときは1週間入院したが、娘がアメリカで生まれたときは2日間で退院するように言われた。また、知人が片肺切除の手術のため入院した際も、日本では通常1カ月ぐらい入院するが、彼を1週間後に見舞いに行ったところ、既に退院した後であった。病院の食事はかなり充実していて、スープの種類からサラダ・ドレッシング・メインディッシュ・デザート・パンの種類にいたるまでいろいろ選択できボリュームもかなりある。アメリカの病院にはボランティアで働いている人が多く、いろいろなところで患者の世話をしている光景を見かけられる。

3) 外来 アメリカでは外来は一般に予約制であり、緊急の場合を除いて予め電話で時間を確認する必要がある。まず最初に大きな病院の周りにある小さなクリニックで診てもらふ。必要があれば設備が整った大きな病院に紹介される。そのため日本のように多くの人が廊下で順番を待っている光景はほとんどみられない。診察室は場所によっては書斎のようなところで、次に待っている人に話が聞かれないように配慮されている。一人あたりの診察時間に余裕がある。またアメリカでは医事裁判が非常に多いこともあり、丁寧に説明してくれる。

4) エイズ 今アメリカではマジック・ジョンソンというプロバスケットボールのスター選手がエイズウイルスに感染し引退することが話題になっているが、医療の世界でもエイズ予防が徹底している。輸血をする際にはホモセクシュアル・麻薬等に関して5分ぐらいにわたり問診をされ、採血者は皆手袋をしている。使用済みの注射針も回収する人が怪我をしないように、また麻薬等の注射に再使用されないように細心の注意を払っている。

以上アメリカの医療事情について簡単に述べたが、私の身近なところで感じたものであり、全体像を表していないかもしれない。日本の医療事情と比べて一長一短があると思われるが、社会背景も異なり単純に比較することは難しいと思う。また、日本で行っているような学校・職場・地域社会での健康診断はアメリカではあまり行われてお

らず、個人の健康は個人で管理するという考えが基本になっていることも、日本とアメリカの社会背景の違いをよく表していると思う。

(保健診療所 的場芳樹)

計 報

吉澤 甫 名誉教授

本学名誉教授 吉澤 甫^{はじめ} 先生は、平成3年12月14日逝去された。享年85。

先生は、昭和5年京都帝国大学理学部を卒業後、南満州鉄道株式会社技師、哈爾濱工業大学教授、朝鮮総督府技師、同地形部長、京都帝国大学理学部講師、同助教授を経て、昭和36年理学部教授に就任、同45年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を授与された。

本学退官後は、(財)日本地下水理化学研究所理事長を務められ、また会社顧問等を歴任された。

先生の専門は、地質学とくに岩石学で、すでに大学院在学中から霞石閃長石その他長石類、ヘスチング石等の造岩鉱物の研究に優れた成果を挙げられた。その後中国東北・朝鮮半島時代には、資源調査やそれに基づく地質構造の研究をされたが、母校に帰られてからは、西南日本に分布するノーライト群と、近畿地方領家帯の花崗岩類等の産状と成因の研究に精力を傾けられ、その詳細さと広範さにおいて学界の最高の水準を極められた。また、我国で初めて電子線マイクロプローブによる造岩鉱物の分析を行われている。さらに地下水の動的・静的状態と地質構造・地層環境との相互作用の研究によって、地下水の制御及び利用技術の発展を計り国土の保全及び国民生活の向上に貢献された。また、トンネル湧水の研究を通じて我国のトンネル土木工学分野の発展に多大の寄与をされた。

これらの研究業績、学術上の貢献に対して、昭和51年には勲三等旭日中綬章を授与された。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

(理学部)

<資料>

国立大学の学生納付金の改定に 関する国立大学協会の要望書

国立大学協会は、次の要望書を関係各方面に提出した。

平成3年12月16日

国立大学協会会長
有 馬 朗 人

国立大学の学生納付金の改定について(要望)

国立大学の予算につきましては、厳しい財政事情のなかで種々ご配慮を頂いていることに對し、深く感謝の意を表するものであります。しかしながら、明年度の予算編成にあたり、国立大学の学生納付金の増額改定が検討されていると伝えられていることについては、国立大学協会として強い危機の念を表明せざるを得ません。

国立大学の学生納付金については、年々繰り返されてきた増額改定により、学生生活の諸経費の高騰とも相まって、その父母の家計への負担は著しく増大しております。国立大学は、我が国の高等教育が総体として均衡のとれた発展をとげるよう、国の責任において全国的にバランスをとって配置されているものであり、高等教育の機会均等の実現を基本的な使命の一つとするものであります。学生納付金のさらなる増額は、この機会均等の最小限の保証をも奪いかねず、ひいては、国立大学の重要な使命達成を危うくするものであります。

また、国立大学は国家、社会の要請に応じて有為な人材の養成を行っており、その教育の成果は学生個人に帰するばかりでなく、国と社会とがその最大の受益者であります。したがって国立大学の学生納付金については、いわゆる受益者負担の原則を単純に適用すべきでないことは申すまでもありません。とりわけ専門分野により学生納付金

に格差を設けることは、国家、社会の要請に対応して高等教育の機会を専門分野のすべてにわたって均等に提供することを本来の目的使命とする国立大学において、到底容認できないところであります。

国立大学協会では、財政収入増の観点から授業料、入学料等の隔年ごとの改定を定着させることについて、かねてから、遺憾の意を表しているところでありますが、政府におかれましては、われわれの意のあるところをご賢察の上、とくに今回の国立大学学生納付金の取扱につき、十分、慎重を期せられますよう、ここに重ねて強く要望いたします。

日 誌

(1991年12月1日～12月31日)

- 12月3日 建築委員会
- 5日 外国人教員、留学生等懇親会
- 〃 カナダ マギール大学 Martin J. Lechowicz 教授他8名来学、総長及び関係教官と懇談
- 7日 連合王国オックスフォード大学 Sir Richard Southwood 学長他2名来学、総長と懇談及び学術交流に関する一般的協定書締結
- 〃 アメリカ合衆国ポリテクニク大学 Otto Vogl 教授夫妻来学、総長と懇談
- 10日 評議会
- 〃 京都大学後援会助成事業検討委員会
- 12日 総長退任式
- 13日 環境保全委員会
- 17日 総長就任式
- 〃 臨時評議会
- 18日 名誉教授称号授与式
- 〃 国際交流委員会
- 〃 国際交流会館委員会
- 20日 附属図書館商議會
- 24日 評議会
- 25日 総長交代式
- 26日 安全委員会

